

「徳本上人と蓮のエピソード」

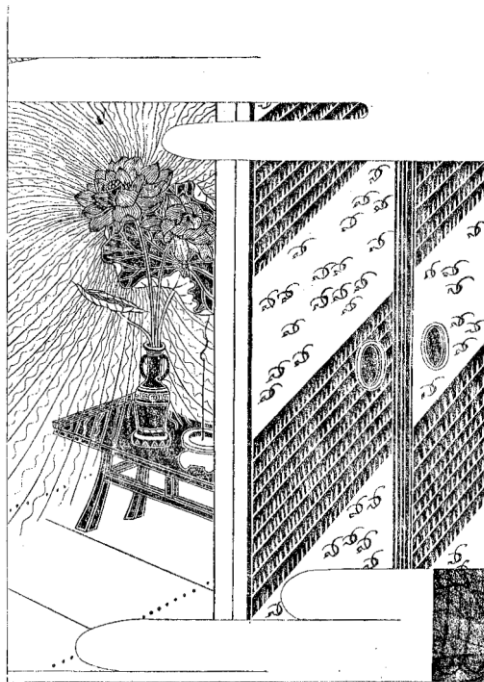
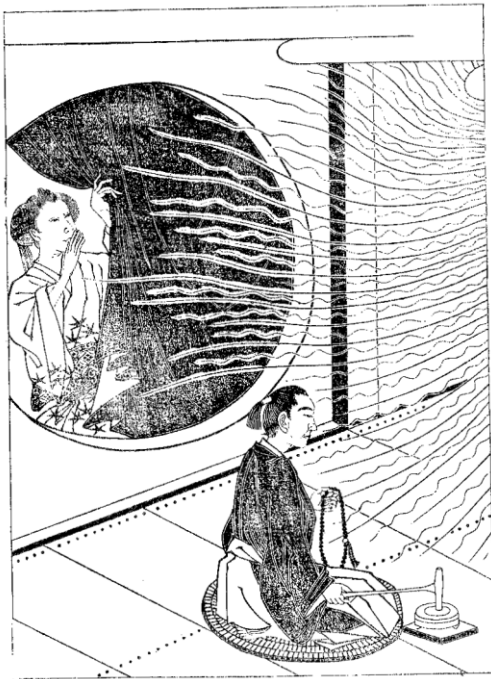
徳本上人が出家前の青年期、十助と名乗っていた頃のことです。

十助は家業の農家を手伝いながら既に出家のころざしを持ち、独自に念仏に励んでおられました。安永5年(1776)父が病を得、十助(19歳)は父のために薬を求めて和歌山まで何度も足を運んだといいます。その思い虚しく、その年の3月に67歳で往生されました。

十助はその後も念仏を称えながら家業に励んでおりましたが、天明2年(1782)財部村(たからむら)往生寺の住持、大円上人について五戒を受けいよいよ念仏行に励みました。

天明3年(1783)の夏のころ、持仏堂の扉が開いて夢のごとく阿弥陀如来があらわれ、十助のもとに歩みよられ頭をなでられました。仏前の花瓶には蓮華があらわれ、これに策励され十助が念仏を称えていると、蓮は花卉を開き金色の光明を放ちました。この光は母堂の寝処までとどき、母堂が驚いて仏間に向かうと、十助が光明の中に端座して念仏している姿を見たといいます。

天明4年(1784)の春、十助がかねてよりの出家の思いを母堂に話すと、母堂も十助の振舞いただならず、折々の不思議な出来事を見られた故に、神仏の御意に恐れ多いことと出家を許すことにしました。この後、往生寺大円上人について出家得度し、名を徳本とあらため大苦行の道へ入られました。偉大なる念仏行者、徳本上人の誕生です。



文章は『徳本行者傳』をもとに八木が意訳